

大学院派遣研修での研究内容の概要

所属校	調布市立富士見台小学校	氏 名	新藤 直美
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・学習臨床コース
研究テーマ	生きることとしての学びの成り立ちに関する臨床学的研究		
<p>1 研究の目的（学校における現状、課題、課題を解決するための研究の位置づけ）</p> <p>子どもの学びを捉えるとき、結果のみの捉え方ではなく、子どもの身体と行為を通して、いまここで生起する関係（意味）をありのままに見つめ、受けとめ直すことが、子どもたちの〈生きられる学び〉の支援を行う上で必要である。</p> <p>本研究では、学習活動における子どもたちの行為や活動の過程で、〈子ども－子ども〉、〈子ども－もの〉、〈子ども－その子どもの自己〉、〈子ども－教師〉とのあいだで相互に働きかけ合う実践的関係性をつくりながら行われている実際の学びの過程ありのままをとらえ直すことにより、子どもたちが、「もの」、「こと」、「人」との働きかけ合いにおいて、どのような行為や意味をつくり、つくりかえているのか、それはどのような〈生きることとしての学び〉としての関係（意味）の生成であるのかを明らかにする。また、この成果を基に、〈生きることとしての学び〉を子どもがつくる過程を支える臨床学的なカウンセリングの在り方について考察を行うことを目的とする。</p>			
<p>2 研究内容（方法・経緯・内容等）</p> <p>〔方法〕</p> <p>本研究では、子どもが、友だちや教師、もの、自己及び他者の行為や活動の出来事とかかわり合う過程における共働的行為や相互作用を、「現象学的態度」と「臨床学的態度」のもと、数々の幼稚園・小学校・中学校での参与観察や周辺の観察により事例収集を行った。そして、西阪仰の「相互行為分析」に基づき、収集した事例場面をトランスクリプトなどを用いて重層的記述によって分析し、子どもたちが学びの場面で行っている〈生きることとしての学び〉の過程を臨床学的に考察していった。</p> <p>この分析と考察により、子どもたちが学びの過程で、どのように行為や意味をつくりつくりかえているのか、それはどのような〈生きることとしての学び〉の生成であるのかを明らかにしていった。そして、子どもたちが行っている〈生きることとしての学び〉の過程を支えていくときに必要となる臨床学的カウンセリングの在り方を探っていった。</p> <p>〔研究の展開〕</p> <p>◇序章 問題の所在と研究の目的及び方法</p> <p>◇第1章 〈生きることとしての学び〉の見えにくさ</p> <p>子どもが実際に生きている行為と世界をその内側から見ることで、子どもを意味をつくる有能な学習者としてみることでいった、子ども観の転換の必要性について論じた。子ども観の転換をはかることで見えてくる学びの姿として、小学校2年生と1年生の国語科の活動事例を取り上げ記述分析を行った。それにより、効果的・効率的に知識や技術の習得を目指す学習のあり方ではなく、子どもたちの生きられた行為が立ち上がってくる〈生きることとしての学び〉の実際のありようと意味について考察した。</p> <p>◇第2章 子どもの学びの道筋</p> <p>小学校2年生図画工作科造形遊び、小学校1年生の生活科の事例を取り上げ、ものや場、状況からの働きかけや働き返しにより、子どもが〈かたち＝意味〉をつくりつくり変える道筋、他者との共働的につくる学びの過程について状況的学習論の視点に基づき考察した。</p>			

◇第3章 自己と他者にひらかれた身体的な応答性による学び

言葉では表現できない身体の底から湧き起こり、互いの身体で語り合い、感じ合うことにより共有空間をつくり出し、そこで互いが響き合って行為を交換し、詩や物語や遊びの共働的世界を創造していく1年生生活科の事例を取り上げた。

身体の応答関係を媒介にして、様々なものに関わりながら少しずつその意味をズラし、重層的な関係として成り立っていることが明らかにされた。さらに、この応答関係を可能にしていることを、竹内の「はずみ」「たかまり」という概念や、メルロ＝ポンティの「語られたことば」「語ること」「活動することば」を援用し考察した。〈活動することば〉を、子ども同士は、言葉として発してはいなが、身体レベルで感じ合い、読み取りあっていることを考察した。子どもたちがこのような身体であるからこそ、相手の〈ことば〉を受けとめて、共同の世界をつくることを可能としていると捉えた。このように、〈生きることとしての学び〉の過程において子どもたちによりつくられ語られる〈ことば〉は、既存の意味や考えを再現する〈ことば〉ではなく、2人の生きていること（行為）と実践的にかかわりながら共働的に、重層的な関係をつくって生まれてきていることが明らかになった。

◇第4章 〈生きることとしての学び〉に寄り添う学習臨床カウンセリング

第3章までの成果と新たな事例を基に、「〈私〉を生きている子どもを捉える過程」、「子どもと子どもの応答する身体の過程」、「子どもと教師の相互作用の過程」にある臨床学的カウンセリングの在り方について考察した。それは、子どもが一人では達成できない学習活動を援助する「支援」ではない。子どもの意味生成過程に、あたかもその現実と一緒に体験し、その子どもと共に一緒につくっているかのようにして、子どもとその場を教師としての〈私〉を生きていることが、学習臨床カウンセリングそのものであるという示唆を得た。また、子どもが身体的な応答関係を媒介として、共働的に意味生成しているのに対して、大人は実際に目に見える事実でしか感じられない身体になっている。そのため、身体に関わらせた応答ではなく、言葉に依存した応答になってしまい、そのことが子どもとのあいだで、意味・関係・世界を共働生成する上でのズレを生じさせることになっている。そこで、子どもが意味生成する応答関係に着目し、学習臨床カウンセリングとして得られる示唆について考察した。

◇終章

本研究の方法として行った記述を重ねる在り方とその意味、研究のまとめをおこなった。

3 研究成果と課題

以下の点については、成果であるとともに、子どもの〈生きられる学び〉に寄り添っているかを常に問い続けていくことは、これからも続く課題である。

◎子ども達とともに：

教師としての〈私〉が、子どもが行っている学びの意味を共に生きたり、子どもたち同士がつながり、学びを連鎖していくような場や状況や題材を用意したりすること。子どもがいまつくる出来事とともに生きるかたち（学習臨床カウンセリングの視点）で、カリキュラムもつくり、つくり変え、つくり広げていくこと。

◎同僚教師とともに：

本研究で明らかになったことをもとに、子どもの〈生きることとしての学び〉に寄り添い、〈学習臨床カウンセリング〉を語り合い、実践していくこと。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	調布市立富士見台小学校	氏名	新藤 直美
派遣大学院	上越教育大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・学習臨床コース
研究テーマ	生きることとしての学びの成り立ちに関する臨床学的研究		
1	<p>○担任クラスにおいて</p> <p>*子どもが行っている学びの意味をとらえ、子どもたち同士がつながり、学びが連鎖していくような場や状況や題材を用意するように努めている。</p>		
所属校での成果活用	<p>○校内において</p> <p>*研究主任として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研究が一部の者による研究ではなく、教員全体のものになる工夫をした。研究会のあり方の工夫や研究便りの発行。 ・授業を通して、子どもの学びが地域の教育力とかかわりながら、どのように成り立っていったか、どのように広がったのか、深まったのか、子どもの力をつけうることだったのかなど、子どもの実際の具体的姿をもとに全職員で語り合い、確かめながら進めていった。 <p>*6月に校内研究において、今後の研究の方向性に向けての提案授業。</p> <p>*子どもの学びの捉え方について、具体的な子どもの姿をあげながらレポートを作成・配布。</p> <p>*修了大学院研究室の教官に来校頂き、参与観察や助言を頂いた(校内4クラス)。</p>		
2	<p>委員会・研修会での成果活用</p> <p>○「日本芸術教授学研究会」の学会誌『芸術教授学』(2005年8月)に研究論文を投稿し、採用された。</p>		
3	<p>○校内研究授業 第4学年 平成17年6月15日(水)5校時</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>研究主題(仮)</p> <p>地域とかかわり、学びを広げる子の育成</p> <p>～地域の教育力を生かし、子ども一人一人のニーズに応える教育活動の展開～</p> </div> <p>1, 単元名 「私も語り手」(国語科発展学習)</p> <p>2, 単元のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物語などの音読を楽しみ、国語学習への意欲を高める。 ・心の動きを想像しながら読む力や、人物の心を聞き手が想像できるように音読する力を身につける。(読むこと) <p>【学習指導要領との関連】</p> <p>C 読むこと</p> <p>カ 書かれている内容の中心や場面の様子がよく分かるように声を出して読むこと。</p> <p>ウ 場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと。</p> <p>エ 読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人一人の感じ方について違いあることに気付くことア いろいろな読み物に興味をもち、読むこと。</p> <p>3, 授業のポイントと研究成果との関連</p> <p>指導案にあるように、今回の授業の構想は、子どもの実態と願いからのスタートである。4年生の児童は、大変素直で何事にも前向きに取り組んでいこうとする児童が多く見られる。しかし、いざみんなの前で表現する場面になると、声が小さくなったり、自分の考えや思いをおもいきり出すことを遠慮してしまったりする姿も見られた。国語科最初の単元『三つのお願い』の学習をきっかけとして、年間通</p>		

3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 等	<p>して、音読に取り組む活動を展開していき、音読を行う中で、物語を読む、語る楽しさも味わわせたいと考えた。そして、この活動をきっかけとして、心の底から声を解き放ち、自分の読みを声に出して表すことの楽しさを味わうことにより、自分に自信をもち表現することはずかしがらない子どもたちになって欲しいと願った。</p> <p>この取り組みには担任と子どもたちだけでも十分に成り立つものでもある。しかし、以下の2つの点で地域の教育力の必要性があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> *自分の読みに満足している子どもたちにインパクトを与え、今後の活動に意欲をもたせる。 *担任一人では子どもたちのグループ活動に十分満足なかわりをする事ができない。 <p>そこで、本市の語り部の会の方13名と保護者の参画をお願いした。そして、子どもたち6グループの中に2～3名ずつ入って頂き、学習を展開させた。授業後には、このような考えをベースに組み立てられた今回の授業を通して、実際子どもたちはどのように「地域とかかわり学びを広げた」のかという点について臨床学的視点から考察を試みた。</p> <p>4. その後の発展</p> <p>学習後子ども達は、ここで得た力を生かし、それぞれが自分のめあてをもって、家庭や学校で音読に取り組む姿が見られた。</p> <p>担任や保護者が感じた専門の方に入って頂くことにより得られた様々な利点、また、「またプロの人に来て欲しい」、「アドバイスをしてくれる人が来て欲しい」、「もっとうまくなりたい」という子ども側のニーズから、2学期は「詩」を取り上げ、専門の方の支援を頂くことを計画した。そして、「詩の音読」と「詩の群読」の2回の授業を実施した。また、グループの活動時に、担任が回りきれないグループの中に入って頂くために、保護者の方へも参画を呼びかけた。授業前と後には、「専門の方」、「保護者」、「担任」の三者で授業の打ち合わせと臨床学的視点からの子ども達の学習の様子の話し合い時間をとった。子どもの学びについて三者で話し合う良い機会がもてた。</p> <p>○その他の授業において</p> <ul style="list-style-type: none"> *総合「ふしぎ発見！多摩川」では、地域の自然ボランティアの方や保護者の参画を得て、年間を通した学習活動を展開。毎回、ボランティアの方とは学習前には打ち合わせ、学習後は臨床学的視点から子どもの学びについて話し合う。
4 今 後 の 活 用 計 画 等	<p>○子どもが行っている学びの意味を共に生きたり、子どもたち同士がつながり、学びを連鎖していくような場や状況や題材を用意することに努めたりする。子どもがいまつくる出来事とともに生きるかたちで、カリキュラムもいまここで作りかえていく。このことは、教材研究をないがしろにする姿勢ではない。豊かな教材研究があってこそ、子どもたちの見せる学びの姿に寄り添えるものと考えている。</p> <p>しかし、教師としての〈私〉は、あらかじめ自分が行った豊かな教材研究の「枠」に縛られることなく、学習臨床カウンセリングの視点をもって、そこで生きる子どもたちの〈生きることとしての学び〉に寄り添って実践していく。</p> <p>○同僚教師や学習に参画してくださる地域の方と共に、子どもの〈生きることとしての学び〉に寄り添い、〈学習臨床カウンセリング〉を語り合い、授業実践を行う。</p> <p>○市の指定校として、成果を広く校外に還元していく。</p>